

## 志賀直哉の初期作品に見るローカル受容の様相

——「ある一頁」「清兵衛と瓢箪」「児を盗む話」を中心にして——

亀井千明

### はじめに

志賀直哉の生涯において、頻繁に引越しが行われたという伝記的事実はあまりにも有名であるが、その転居歴は晩年の談話記録「転居二十三回」(『心』第十一巻七号「満十周年記念特輯」、昭和三十三・七)にも詳しい<sup>(1)</sup>。年少期は父の仕事や都合に伴って、壮年期からは独立して自らの家族を伴うもので主体的な転住だったといえる。

ところで、転居は字義的に言うと、居を変える、住まいを変えるということだが、志賀は若い時分より旅への嗜好も強く、一時的に居を変えろというならば、旅行の体験も入ってくるのかもしれない。先の「転居二十三回」には、旅とも転居ともつかないような、志賀の若い頃に頻繁に遂行された「地方行き」の経験も入れられており、晩年の志賀の意識としては、それらは確固たる「転居」と認識していたことが窺えるのである。

本稿で取り上げたいのは、その志賀の青年期——明治四十年代から大正初期にかけて——における地方行きである。明治期以降、日本は東京に政治を置き、東京を中心として国が整備されていたといえるのだが、中心化されていく東京とそれ以外の地域との差は当然生じてきていた事は容易に予想できる。

よって現在よりも都心と地方の生活格差が激しいだろう当時に、東京在住の青年が一時的でも地方へ住まうということは、そこで何かしらの認識摩擦が生まれるこ

とが想像できはしまいか。そして地方経験の元に書かれた作品には、いかに書き手として地方を汲み取り受容したのか、あるいは拒否したのかなどといった見方も出てくるはずである。志賀には京都市行き、尾道行きという比較的短時間で終わった地方への転居経験があるが、その中でいくつかの作品が生み出された。それは「ある一頁」(明治44・6「白樺」)「清兵衛と瓢箪」(大正2・1・1「読売新聞」)「児を盗む話」(大正3・4「白樺」)といった、いずれも伝記的事実と結び付けられる形で読まれてきた作品ばかりで、「ある一頁」は志賀の京都市行きの体験を下敷きにされたもので、後の二作品は尾道へ行った際書かれた作品である。そのような従来の読みに反して、地方体験という視点から、作品にアプローチしていくこととする。志賀の作品に表れる地方の姿は如何なるもののだろうか。

### 1 「ある一頁」における擬似的京都

「ある一頁」は草稿の段階では、「一日二夕晩の記」と題されているのだが、そこから分かるように、作品内容としては非常に短い時間内の出来事を描いたものである。家族、友人たちに仰々しく見送られ「一週間位では帰れないネ」と笑う「彼」だったが、実際は直ぐに戻ってくる、といった話の顛末となる。その原因として、行った先の京都へ「彼」が感じる違和感である。その違和感は、到着して間もなく、

荒神橋と命じて車に乗る。其頃から彼は急に寂しい、イヤな心持になつて来

た。彼は九月初旬の京都と云ふものが余りに世帯染みた姿になつてゐるが、これまで晴着に着飾つた春ばかりに來た自分にこんな心持をさせるのかも知れぬと考へた。(二)

といった、マイナスの印象を持つことに表れている。それでもここでは、そう考えるのは季節せいだと自身への言い聞かせを行なっている。このように、「彼」に就つて京都は初めて訪れた場所ではなく、かつて訪れたことのある記憶を持つている街である。

到着後直ぐ、京都に落ち着く場所として住まう家を探し始めるのだが、なかなか思うように見つからず難航を極めることとなる。そのような状況において、「彼は知っているはずの京都の中で「落魄して放浪」しているかのような感覚を持ち始める。それは京都における道筋を「御所の横から高等女学校の前を過ぎて、車は右に折れた」「もと来た方へ引き還した」などと詳細に描写することにも表れているといえる。

このように、かつて見たであろう街の風景をわざわざ描き出そうとするのは、それが身近で馴染んだものではないからではあるまいか。風景に距離を感じるからこそと考えることが出来るのである。

そして京都側もまた彼を「知らない」、といえる。例えば、京都の法科大学に通うかつての同級生である「今泉」を見かけた際、知り合いなのにもかかわらず「彼は「今泉」に見出されず、自ら声を掛けていくことになってしまつたり、家主に身分証明を求められたりなどする。家探しが難航するのも一つだが、これらから「彼」が京都において、全く受け入れられていない姿が浮き彫りとなつてくるのである。

このように、京都は志賀にとって、受け入れられなかつた場所として描かれているのだが、それは言葉の受容の問題からも窺うことができる。次の一文は、「彼」と京都の人間との会話である。

彼は前年の春一度泊つた事のある四条小橋を下つた所の宿へ行くつもりだつた。車掌が、

「何処ですか」といふのに、

「よ条小橋」と云つたら、

「四条小橋ですか」と直ぐ云い直された。彼は何だかみんなが寄つてたかつて乃公を侮辱するのだと云ふ気がして來た。(七)

このように、京都独自の言い方にわざわざ直されるのであるが、それ以外に気付くこととして、この場面も含めていわゆる京都弁といわれる方言でもって、京都の人々の会話が描かれていないことである。その殆どが、「彼」と変わらない言いぶりと言へる。方言などの言語に対する受容傾向にも、京都への拒否的な姿勢が見られるといえまいか。

「ある一頁」において、これまで訪れたことのある町だった京都であるが、「彼」が住もうとする時、途端京都は町全体で彼を拒絶してくる。それは彼の心理の反映ともいえるかもしれないが、作品全体にあらゆるレベルでそのことが表されていることが確認できるのである。

いずれにしても、志賀はこの「ある一頁」において、京都という地方を記憶が喪失された場所として描き、容易に居場所になり得るような所ではなかつたということがいえるのではないだろうか。

## 2 イメージ化された地方——「清兵衛と瓢箪」の場合——

「ある一頁」では苦心が見られた地方受容も、尾道行きでは変化を見せてくることとなる。まず、「清兵衛と瓢箪」について考えたいのだが、この作品で見えるのが方言の受容である。

「これ何ほかいな」

「ぼうさんちやけえ、十銭にまけときやんせう」

といったような、正確な尾道の方言かどうかは断定しにくいだが、志賀の他作品で

は見られない。確実に地方の言葉を駆使する形で作品に織り込んでいくことが確認できるのである。

ところで、「清兵衛と瓢箪」は尾道で見聞した事実を元にしていてというのだが、尾道から里見惇に宛てた通信文において、尾道における瓢箪の大流行について報告した後、大正元年十一月十二日の見聞として、

今日道後へ渡る船で聞いた話だが、ある子供が、二十銭で瓢箪を買って、それを学校へ持って行つたら先生に大変叱られて、自家まで小言を云ひに来たのださうだ。それで其子供は又両親からヒドク怒られた。親爺は大工で追ッ出すといふ程の騒ぎだつたといふ。

自作解説「創作余談」（昭和3・6『改造』）でも「尾の道から四国へ渡る汽船の中で人がしてゐるのを聴き」とあるが、この里見への通信文の内容からも信用できるものであろう。

このように、地方で見聞した話を元に作品化するというような、一種の地方受容の形が見られる。

では作品内容のレベルにおいて、どのような地方が描かれていることが確認できるだろうか。

清兵衛は地方の小学校に通う子供だが、学校へ気に入った瓢箪を持って行った際、教員の逆鱗に触れることとなる。そこで発せられる言葉は「到底将来見込のある人間ではない」といった、立身出世の当時の教育方針が垣間見えるものであり、地方の子供である清兵衛もまた、例外なく、国の教育指針の中に身を置いていることが確認できるのである。

また、この教員の考え方として、「此土地の人間が瓢箪などに興味を持つ事が全体気に食わなかつたのである」といったような、尾道という土地への特別な視線を持っていることが確認できる。それは単に自らが教える児童が、授業中に瓢箪遊びをすることへの注意といった次元を超えて、「此土地の人間」が高尚な趣味を持つことへの、違和感と否定的な感情である。

恐らく、他所から来た教員は、この発言から都市部の人間とは断定できないものの、尾道よりは大きな市から来た人間と想定できる。そこには大きな市から、それより小さい市に対する見下しの視線があることを受け取れるのである。過剰なまでの教員の追及が、そこへ拍車を掛けてのだが、入るこの上から下へと視線の構図があることを、わざわざ志賀が作品中に織り込んでいえるだろう。

このように、地方での見聞を題材とし得た志賀であったが、そこには地方対地方以外という構図も配置されており、単なる見聞録に終わらせていないところから、地方受容の一端を表わすものとして見て取れるのではないだろうか。

### 3 イメージ化された地方(2)——「児を盗む話」の場合——

「児を盗む話」は、父親に罵倒されたことをきっかけに家を出た「私」が、まずは東京の京橋区に住まい、次に「五百哩ばかりある瀬戸内海に沿うた或小さい市」へと来たところから始まる。都市から地方へと移動した姿が見て取れる。

「ある一頁」と違うところは、住まいの速やかな決定である。もはや住まいに困るようなところは見当たらない。

その「小さな市」は住んでみると、「景色はいい所」で、「東京とは全く異つた生活が私を喜ば」していることが確認できる。

ただ、そのような生活も長くは続かず、次第に「東京が恋しく」なつてき、近場を旅したりなどして気を散じる。この時点で「私」は東京から来たものとして、見聞などを通じ地方を体験していることが分かる。その姿はあくまで地方の中の他者であり、よそよそしい姿といえる。

地方への直接の関わり方というと、子供を誘拐するという形であった。

小さい女の子を自宅へと連れ去つた「私」は、「田舎の子供らしいいやな臭ひ」のする女の子と自分の部屋で遊び、あやす。

しかしこの歪な地方への関わり方は、当然良い結果を生み出すことはない。最終的に、警察が彼の家を訪ねてくるわけだが、女の子の母親は、「泣きながら烈しく私を罵」り、「私の背中をどんと強く突」く。それは「私」への地方の拒絶ともい

える。

結局誘拐をするに至るまでの「私」の行動を追ってみると、殆どが独りでいることが分かる。つまり、地方において誰も知る人はいなく、接触（それも身体的に）をするものといったら、按摩をする男などといった、金銭を介在するような関係性の中でしか生れなかったのである。

このような中で「私」は自由に身体を占有できる女の子の存在を強引に手に入れる。都市から来た青年は、誰も知らない地方の中で、法に触れるような形でしか人と深く関わることができなかつた。それは歪んだ対人関係ともいえるし、地方と都市という対比関係が、人物を通して描かれているとも取れる。

### おわりに

志賀の初期作品において、〈地方〉は作品中で確実に存在している。それは違和であつたり、拒絶であつたりなど、志賀の持つ〈地方〉観といえるものが露呈しているとも受け取ることが出来る。

そして、それは都市部の青年が地方で体験しえたものという、同時代における一つの体験談としても特記すべきものではないだろうか。

この後、志賀の中期の文学活動においても志賀は地方住まいをしていくのであるが、その時における地方と、今回の初期作品における地方とはまた別の様相を見せてくるのである。それは別稿で論じることとする。

### 註

(1) 仕事部屋を借りる程度の転居も入れれば、「転居二十三回」における二十三回の転居歴よりも多くなってくる。

(2) 「ある一頁」は志賀の京都行きをそのまま描いた作品として、「清兵衛と瓢箪」は、清兵衛イコール志賀と捉え、父親への反抗の姿を見て取り、「児を盗む話」も主人公を志賀と見て取るなどといった先行研究の傾向が見られる。

付記・本文引用は岩波書店刊行の『志賀直哉全集』（平成二一〜一五）に拠るものとする。尚、旧字は総て新字に改めた。